

三重県のへき地教育・複式教育についての一考察

—三重県のへき地指定校・複式教育校へのアンケートを踏まえて—

松本 栄*

A study on remote education and multi-grade education in Mie prefecture
-Based on a questionnaire survey to remote designated schools and multi-grade
education schools in Mie prefecture-

Sakae Matsumoto*

要 旨

本研究では、三重県のへき地指定校ⁱや複式教育校ⁱⁱへのアンケートを踏まえて、三重県のこれからのへき地・複式教育に何が必要かを考察していく。

三重県においては、近年、児童・生徒数の減少により、これまで複式学級がなかった学校においても、複式学級が編成されるようになった。そのような学校においては、学級経営、授業実践において、混乱が予想される。そこで、三重県内のへき地指定校・複式教育校へのアンケートを行うことで、三重県のへき地・複式教育の取り組みにおける成果や課題など、教育現場の実態を明らかにした。成果としては、児童・生徒が少人数の中、異学年で関わる機会が増え、豊かな人間関係をつくっていきけることや、子どもたちが共に学び合う姿勢が身につくやすいということである。一方、課題は、複式学級の場合、教員の教材研究の時間が増大することや、複式学級の指導体制をいかに教員全体に広げていくかということ。また、一人の教員が同時に2つの学年を教える通称：わたりの授業において、教員が直接、児童・生徒を指導できない時間（通称：間接指導）をいかに充実させていくかということも課題である。さらに、少人数であるが故に、児童・生徒にとって多面的な見方が身につくにくいということもある。

このようなアンケートの実施と並行して、筆者は、複式学級の授業研究を積極的に進めている小学校を訪問したり、全国的にへき地が多い地域の先進的な取り組みを研究したりし、三重県のへき地・複式教育にこれから必要なことを考察した。それは、校内においては、校内の指導体制の徹底、教職員の分担と協働であり、学校間においては、教材の共有化、オンラインでの遠隔合同授業、大学・附属学校との連携であると考えている。

今後も、各学校や教育委員会との連携を深めながら、三重県のへき地・複式教育の充実に向けて取り組んでいきたい。

キーワード：教材研究の時間の増大、わたりの授業における間接指導、児童・生徒の多面的な見方、校内の指導体制の徹底、教職員の分担と協働、教材の共有化、オンラインでの遠隔合同授業、大学・附属学校との連携

1. はじめに-問題意識と研究目的-

筆者は、三重県内の公立小学校に教諭として26年間勤務した。しかし、この間、複式学級を有する学校に勤務したことはなく、ましてや複式学級の担任をした経験もなかった。筆者が複式学級を身近に感じるようになったのは、管理職となり、三重県内唯一の3級へき地指定の中学校へ赴任した時であった。その中学校は小学校と併設されており、その2つの学校運営に関わる中で、教員と児童・生徒の強いつながりや、異年齢の子どもたちの豊かな人間関係、学校と保護者・地域が一体となった教育活動といった、へき地・複式教育の魅力に触れることができた。この経験をもとに、2023年度より、この三重大学教職大学院で実務家教員となり、院生に向けて、へき地・複式教育についての授業を行っている。

しかし、ここで1つの疑問に直面する。三重県内のへき地・複式教育の現状はどうなっているのかということである。筆者が長く勤務した市においては、児童・生徒数が減少し、この10年間で、今までは

*三重大学大学院教育学研究科 教職実践高度化専攻

複式学級が無かった学校においても、複式学級を編成した学校が増えている。そのように考えると、三重県の他の地域においても、複式学級を新たに編成した学校が増え、教育現場が混乱しているのではないかと予想した。

そこで、三重県内のへき地指定校、複式教育校に直接アンケートをすることで、実際の教育現場の様子を具体的に把握したいと考えた。そこから、三重県内のへき地・複式教育における課題を分析したい。さらに、実際の複式教育の現場を視察し、教員の声を聴いたり、へき地・複式教育において先進的な取り組みの事例を参考にしたりしながら、三重県のへき地・複式教育の充実のために、これから必要になってくることを考察したいと思う。

2. 三重県のへき地指定校・複式教育校へのアンケートと回答について

(1) アンケート対象校と回収率について

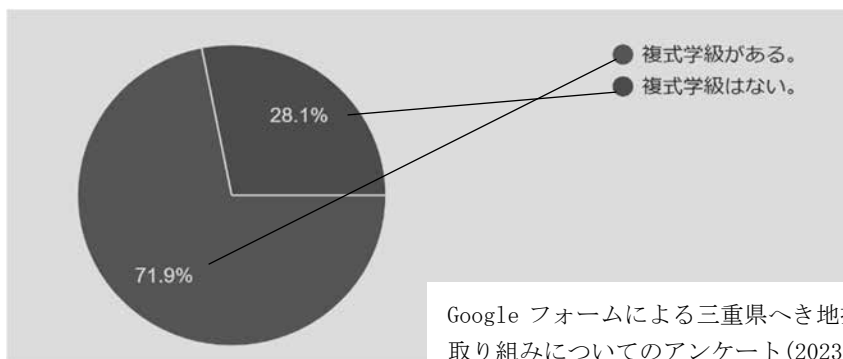
そこで、三重県へき地複式教育研究会、三重県教育委員会の協力を得て、三重県へき地複式教育研究会が示す「三重県へき地指定校及び指定外複式学級校」64校へ、2023年8月中旬より2023年9月末までGoogleフォームにてアンケートを行った。回答については、64校全てから回答があった。

(2) 質問項目と回答結果について

質問内容と回答結果を以下に示す。なお、①⑱⑳については、64校全てが回答した。②～⑨については、実際に複式学級がある学校のみ回答。⑩～⑱については、わたりの授業の実施校のみ回答した。

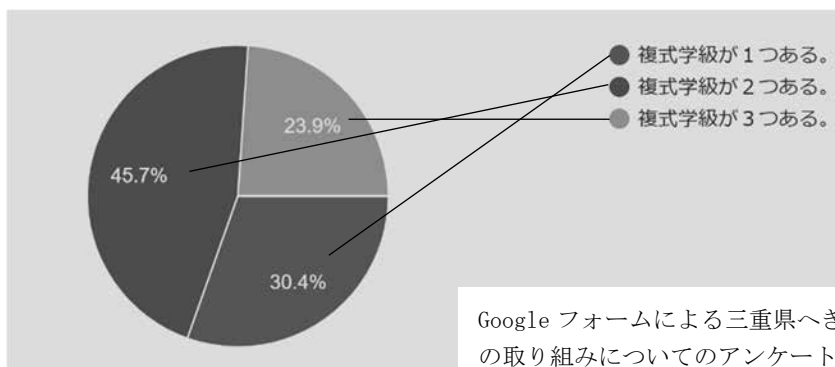
① (質問) 複式学級はあるか。

図1 「複式学級はあるか。」の回答結果



② (質問) 複式学級の学級数はいくつか。

図2 「複式学級の学級数はいくつか。」の回答結果



③ (質問) 複式学級の学年と児童・生徒数

表1 「複式学級の学年と児童・生徒数」の回答結果

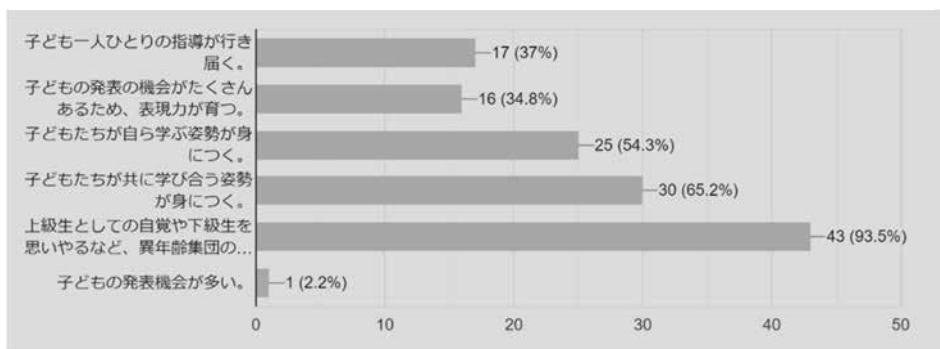
複式学級の学年	三重県の学級数合計	2学級の合計人数の平均(小数第2位は四捨五入)
小学校1・2年複式	15	6.4
小学校2・3年複式	14	13.8
小学校1・3年複式	1	3
小学校2・4年複式	1	9
小学校3・4年複式	26	9.6
小学校4・5年複式	9	12.3
小学校5・6年複式	19	9.0
中学校1・2年複式	0	
中学校2・3年複式	0	

Google フォームによる三重県へき地指定校及び複式教育校の取り組みについてのアンケート(2023.8)より

④ (質問) 複式学級の学級経営において、日頃感じている良い点は何か。(複数回答可)

- 子ども一人ひとりの指導が行き届く。
- 子どもの発表の機会がたくさんあるため、表現力が育つ。
- 子どもたちが自ら学ぶ姿勢が身につく。
- 子どもたちが共に学び合う姿勢が身につく。
- 上級としての自覚や下級生を思いやるなど、異年齢集団の中で、豊かな人間関係ができる。
- その他

図3 「複式学級の学級経営において、日頃感じている良い点は何か。」の回答結果

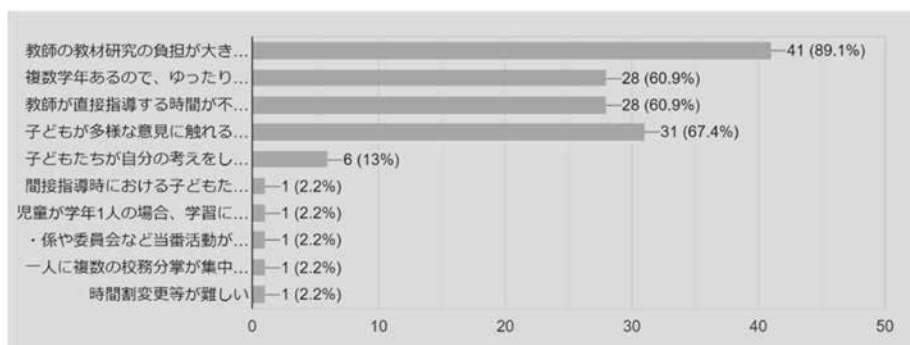


Google フォームによる三重県へき地指定校及び複式教育校の取り組みについてのアンケート(2023.8)より

⑤ (質問) 複式学級において、日頃、悩んでいる点は何か。(複数回答可)

- 教師の教材研究の負担が大きい。
- 複数学年あるので、ゆったりと指導することができない。
- 教師が直接指導する時間が不足してしまう。
- 子どもが多様な意見に触れる機会が少ない。
- 子どもたちが自分の考えをしっかりと発表できる場が少ない。
- その他

図4 「複式学級において、日頃、悩んでいる点は何か。」の回答結果



Google フォームによる
三重県へき地指定校及
び複式教育校の取り組
みについてのアンケー
ト(2023.8)より

少数意見としては、以下のようなものがあつた。

- ・間接指導時における子どもたちへの支援や指導方法の定着
- ・児童が学年で一人の場合、学習につまずくと次にいけない。
- ・係や委員会活動など当番活動が忙しい。
- ・一人に複数の校務分掌が集中し、負担が大きい。
- ・時間割変更等が難しい。

⑥ (質問) 複式学級の学級経営において、普段から工夫していることは何か。(自由記述)

(回答) (自由記述のものを簡潔に整理した)

- ・異学年の交流を大切にしている。
- ・学校全体の交流を大切にしている。
- ・授業によって学習形態を変える工夫をしている。
- ・わたりの授業実践の研究をしている。
- ・学校全体で指導している。
- ・ICTを活用して、他の学校との交流を行っている。
- ・次年度も使用できる教材を準備して、引き継ぎを意識している。

⑦ (質問) 複式学級の学級経営において、課題となっていることは何か。(自由記述)

(回答) (自由記述のものを簡潔に整理した)

- ・指導に目が行き届きにくい。
- ・子どもたちの関係が固定化しやすい。
- ・多面的な考えに触れる機会が少ない。
- ・同世代の子どもたちと関わる機会が少ない。
- ・複式学級の場合、生活科や総合など、活動に支障が出やすい教科がある。

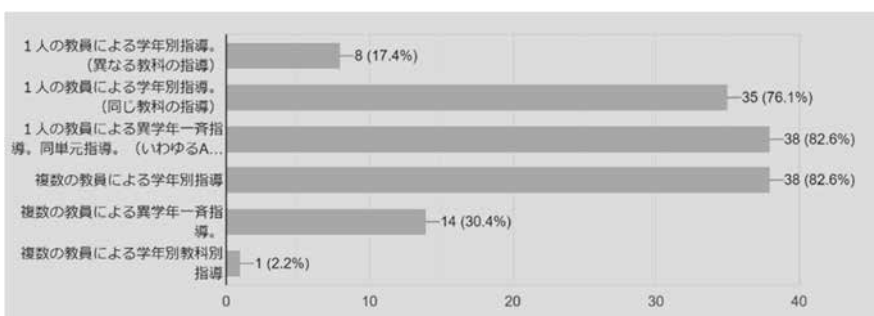
⑧ (質問) 複式学級の授業形態はどうなっているか。(複数回答可)

- 一人の教員による学年別指導 (異なる教科の指導)
- 一人の教員による学年別指導 (同じ教科の指導)
- 一人の教員による異学年一斉指導。同単元指導
- 複数の教員による学年別指導

複数の教員による異学年一斉指導

その他

図5 「複式学級の授業形態はどうなっているか。」の回答結果

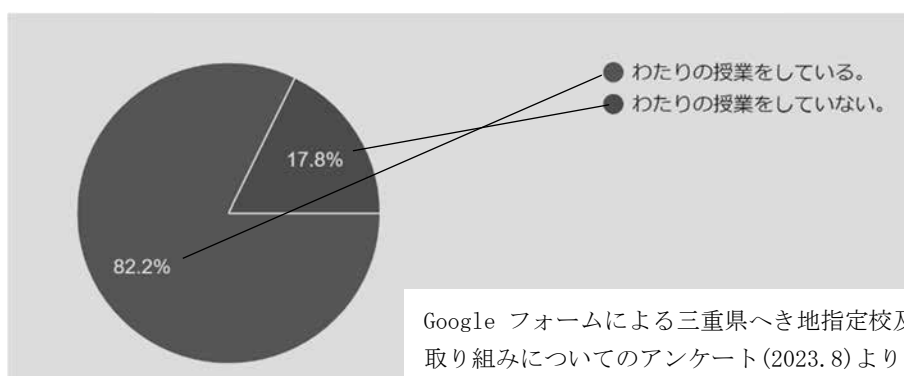


Google フォームによる三重県へき地指定校及び複式教育校の取り組みについてのアンケート(2023.8)より

⑨ (質問) わたりの授業の実施について

(わたりの授業とは、一人の教員が異学年集団を学年別に指導する授業形態をいう)

図6 「わたりの授業の実施について」の回答結果



Google フォームによる三重県へき地指定校及び複式教育校の取り組みについてのアンケート(2023.8)より

⑩ (質問) わたりの授業は、1週間の授業時間の内、何時間実施しているか。(自由記述)

(回答)

各学校によって、わたりの授業時数は異なるが、回答の中で、最少時間は、1週間の内の4時間。最多時間は、1週間の内の15時間。

⑪ (質問) わたりの授業における教科は何か。

(回答)

- ・国語 ・算数 ・道徳 ・音楽 ・図工 ・書写 ・総合 ・特活
- ・中でも、国語、算数という回答が多かった。

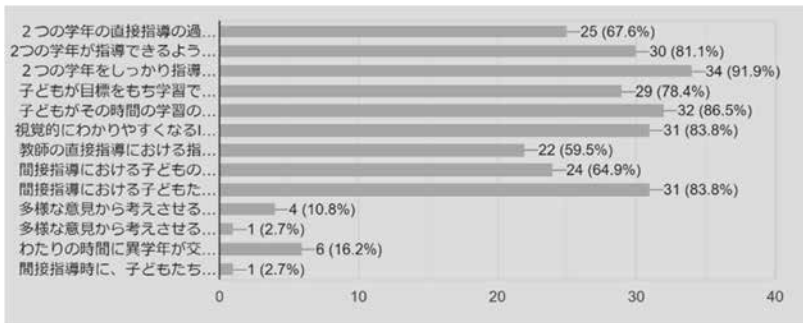
⑫ (質問) わたりの授業において、日頃、工夫している点は何か。(複数回答可)

2つの学年の直接指導の過程が重ならないように、学習過程を学年別にずらすこと。

2つの学年が指導できるように、学習内容を工夫すること。(例えば、1つの学年の内容が直接指導をたくさん必要とする場合、もう1つの学年は、直接指導が少なくすむようにする。)

- 2つの学年をしっかりと指導できるような直接指導と間接指導の時間の調整
- 子どもが目標をもち学習できるような、めあての充実
- 子どもがその時間の学習の手順が理解できるような学習スケジュールの可視化
- 視覚的にわかりやすくなるような ICT の活用
- 教師の直接指導における指示や発問の提示
- 間接指導時における子どもの一人学びの充実
 - (一人学びとは、間接指導時に児童・生徒一人ひとりが自分で学習していく学び方)
- 間接指導時における子どもたちのとも学びの充実
 - (とも学びとは、間接指導時に、児童・生徒が話し合いながら協働的に学習していく学び方)
- 多様な意見から考えさせるための、教師が子ども役になったり、マスコットなどを学習友だちに設定したりする工夫
- 多様な意見から考えさせるための、オンラインによる他校の子どもたちも参加しての授業形態
- わたりの時間に異学年が交流しあう時間の設定
- その他

図7 「わたりの授業において、日頃、工夫している点は何か。」の回答結果



Google フォームによる三重県へき地指定校及び複式教育校の取り組みについてのアンケート(2023. 8)より

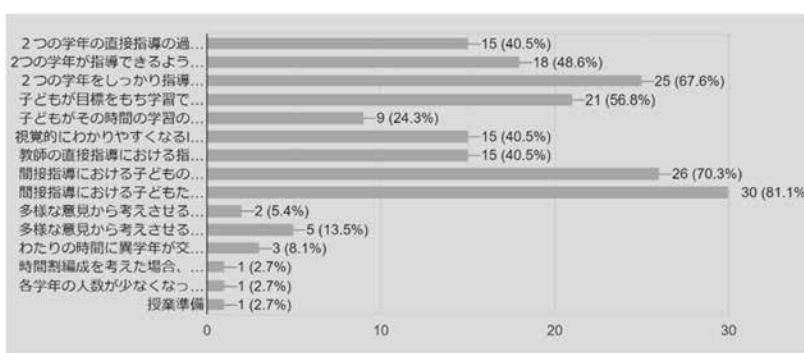
少数意見としては、以下のようなものがあった。

- ・ 間接指導時に、子どもたちが自分たちで学習を進められるように学習リーダー（とも学びにおいて、ガイド役となり、協働的学習を推進するリーダー）を設定している。

- ⑬ (質問) わたりの授業において、特に力を入れて取り組んでいることは何か。(自由記述)
 (回答) (自由記述のものを簡潔に整理した)
- ・ 学習スケジュールの可視化、学習のめあての明示
 - ・ ワークシートの充実
 - ・ ICT の活用
 - ・ 学習リーダーの育成、ガイド学習（ガイド役の子どもがリードしながら、子どもたちの力で進めていく学び）など間接学習の際の子どもたちの自主的活動
 - ・ わたりとずらしの指導時間の調整
- ⑭ (質問) わたりの授業において、課題となっていることは何か。(複数回答可)
- 2つの学年の直接指導の過程が重ならないように、学習過程を学年別にずらすこと
 - 2つの学年が指導できるように、学習内容を工夫すること
 - 2つの学年をしっかりと指導できるような直接指導と間接指導の時間の調整
 - 子どもが目標をもち学習できるような、めあての充実

- 子どもがその時間の学習の手順が理解できるような学習スケジュールの可視化
- 視覚的にわかりやすくなるような ICT の活用
- 教師の直接指導における指示や発問の提示
- 間接指導時における子どもの一人学びの充実
- 間接指導時における子どもたちのとも学びの充実
- 多様な意見から考えさせるための、教師が子ども役になったり、マスコットなどを学習友だちに設定したりする工夫
- 多様な意見から考えさせるための、オンラインによる他校の子どもたちも参加しての授業形態
- わたりの時間に異学年が交流しあう時間の設定
- その他

図8 「わたりの授業において、課題となっていることは何か。」の回答結果



Google フォームによる三重県へき地指定校及び複式教育校の取り組みについてのアンケート(2023. 8)より

少数意見としては、以下のようなものがあつた。

- ・ 時間割編成を考えた場合、継続的な加配教員の配置
- ・ 各学年の人数が少なくなつてきており、従来行ってきたペア・グループ学習をどうしていくか。
- ・ 授業準備

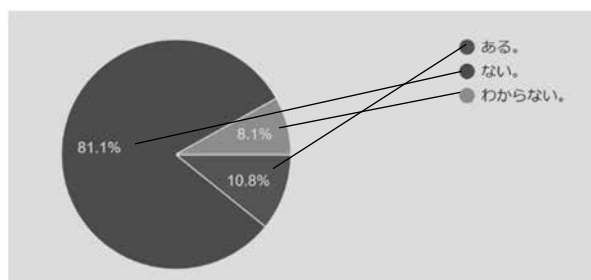
⑮ (質問) わたりの授業において、特に課題となっていることは何か。(自由記述)

(回答) (自由記述のものを簡潔に整理した)

- ・ 間接指導時における児童への対応
- ・ 間接指導時における児童の主体的な話し合い、児童同士の深め合い
- ・ わたりの授業の研修の充実
- ・ 後任者への引継ぎ

⑯ (質問) わたりの授業のワークシートやリーダー学習のルールなど、わたりの授業における資料がオンライン上で、近隣の学校間で共有できるシステムはあるか。

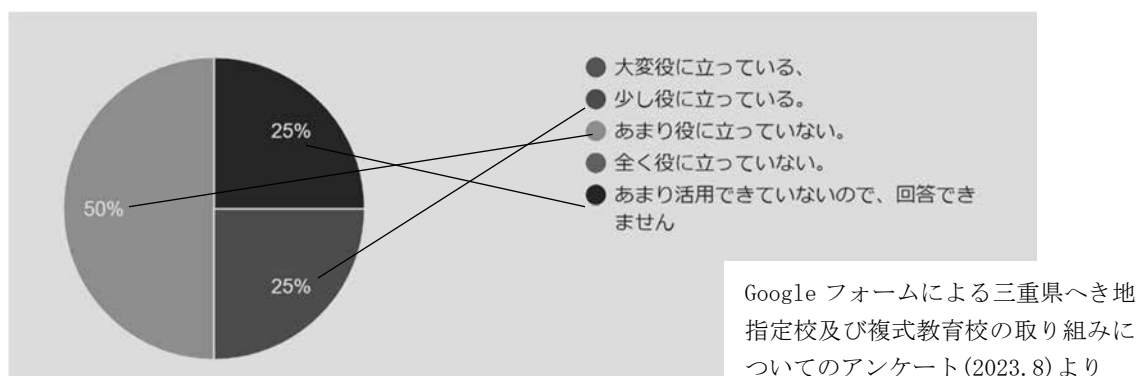
図9 「わたりの授業における資料がオンライン上で、近隣の学校間で共有できるシステムはあるか。」の回答結果



Google フォームによる三重県へき地指定校及び複式教育校の取り組みについてのアンケート(2023. 8)より

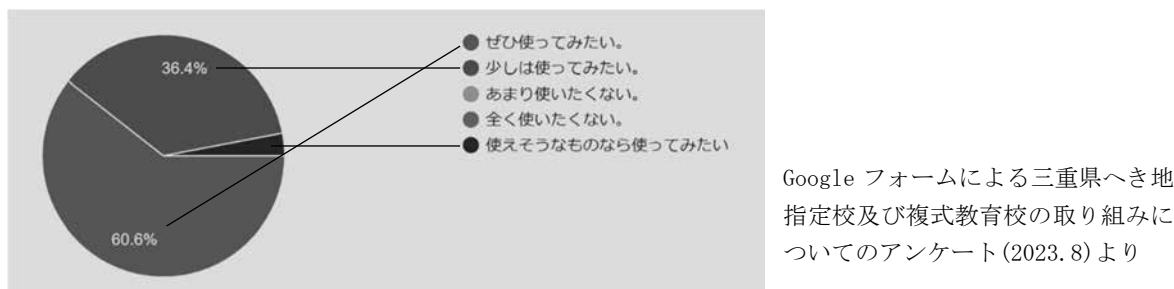
- ⑰ (質問) (あると回答した場合) そのシステムは役に立っているか。

図 10 「そのシステムは役に立っているか。」の回答結果



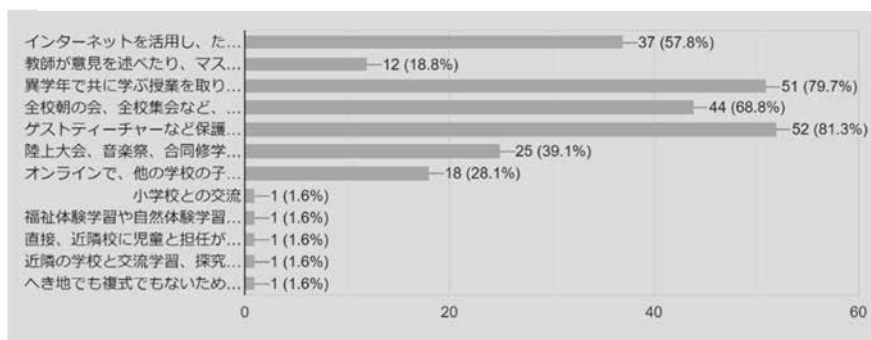
- ⑱ (質問) (システムがないと回答した場合) もし、そのようなシステムがあれば、使ってみたいか。

図 11 「もし、そのようなシステムがあれば使ってみたいか。」の回答結果



- ⑲ (質問) へき地指定校や複式学級を有する学校においては、子どもたちが多様な考えに触れる機会が少ないことや、その中で自分を表現する場が少ないことが課題になると考えています。このような課題を解決するために、貴校で取り組んでいることは何か。(複数回答可)
- インターネットを利用し、たくさんの情報から多様な考えに触れさせる。
 - 教員が意見を述べたり、マスコットなどの学習友達を設定したりする。
 - 異学年で共に学ぶ授業を取り入れている。
 - 全校朝の会、全校集会など学校全体で共に学ぶ教育活動を取り入れている。
 - ゲストティーチャーなど保護者や地域の方が教育活動に参画する機会を取り入れる。
 - 陸上大会、音楽祭、合同修学旅行など、他の学校との交流を行う。
 - オンラインで、他の学校の子どもと授業を行ったり、交流したりする。
 - その他

図 12 「多様な考えに触れ、自分を表現する場づくりのため、取り組んでいることは何か。」の回答結果



Google フォームによる三重県へき地指定校及び複式教育校の取り組みについてのアンケート (2023. 8) より

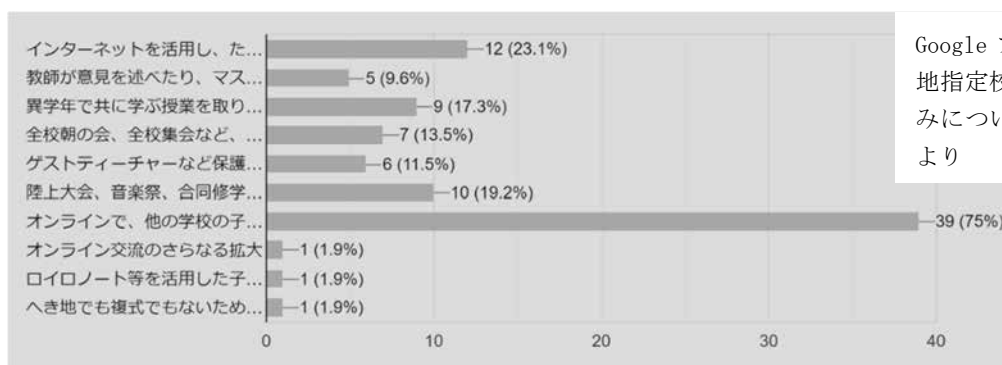
少数意見としては、以下のようなものがあった。

- ・福祉体験学習や自然体験学習など、体験的な学習を取り入れ、いろいろな人や物と関わりをもち、普段できないような学習をすること
- ・近隣の学校と交流学習、探究学習などの発表を行っている。
- ・へき地でも複式でもないため、上記の対応はしていない。

⑳ (質問) ⑱において、今はまだ行っていないが、今後取り組んでいきたいことは何か。(複数回答可)

- インターネットを利用し、たくさんの情報から多様な考えに触れさせる。
- 教員が意見を述べたり、マスコットなどの学習友達を設定したりする。
- 異学年で共に学ぶ授業を取り入れている。
- 全校朝の会、全校集会など学校全体で共に学ぶ教育活動を取り入れている。
- ゲストティーチャーなど保護者や地域の方が教育活動に参画する機会を取り入れる。
- 陸上大会、音楽祭、合同修学旅行など、他の学校との交流を行う。
- オンラインで、他の学校の子どもと授業を行ったり、交流したりする。
- その他

図 13 「多様な考えに触れ、自分を表現する場づくりのため、今後取り組んでいきたいこと」の回答結果



Google フォームによる三重県へき地指定校及び複式教育校の取り組みについてのアンケート (2023. 8) より

少数意見としては、以下のようなものがあった。

- ・オンライン交流のさらなる拡大
- ・ロイロノート等を活用した子ども同士の学び合いのシステム作り
- ・へき地でも複式でもないため、上記の対応はしていない。

(3) 回答結果からの分析

上記のアンケートの回答結果①～⑤において、次のように分析する。

① 複式学級の有無について

「公立義務教育諸学校の学級編成及び教職員定数の標準に関する法律」によれば、小学校の場合、2学年の児童数が16名以下の時、複式学級となる。ただし、2学年の内、小学校1年生を含む場合は、8名以下の時、複式学級となる。また、中学校の場合は、2学年の生徒数の合計が8名以下の時、複式学級となる。この基準に照らして、三重県へき地複式教育研究会の「へき地指定校及び指定外複式学級校一覧」を見れば、全64校の内、52校の小中学校が複式学級を有することとなる。つまり、「三重県のへき地指定校及び指定外複式学級校」の81.3%が複式学級を有することとなる。

しかし、アンケートの結果を見ると、複式学級を有する学校は、「三重県のへき地指定校及び指定外複式学級校」の内の71.9%であった。これは、複式学級の基準があっても、都道府県が独自の学級編成の基準を設定し、さらに市町村教育委員会が学校の児童・生徒の実態に応じ、柔軟に学級を編成することができるためである。三重県においては、教育現場の声を踏まえ、教職員配当基準の改善や加配の増加についての人的支援を行ったため、一定数、複式学級の解消につながっていると考えられる。

この複式学級解消のための加配の要因には、複式学級設置による教員一人ひとりの業務の増加への懸念、教員や保護者が抱く児童・生徒の学力保障への不安などがあるのではないかと考える。

② 複式学級の学級数について

複式学級の学級数については1学級もしくは2学級を有する学校が全体の約76.1%を占める。3学級を有する学校は全体の23.9%で、もっとも少なかった。①の分析を含めて考えると、3つの複式学級となると、教員が減り、学校運営上、個々の教員の負担も増えていくため、県の人的支援などで3つの複式学級を2つにするなど、一定数、複式学級を解消していることが考えられる。

③ 複式学級の学年と児童・生徒数について

小学校3・4年生の複式学級がもっとも学級数が多かった。次いで多いのは、小学校5・6年生の複式学級である。小学校中学年や高学年になると、複式学級のわたりの授業における間接指導がある程度可能になるため、各学校としても複式学級の導入に踏み切っているのではないかと考えられる。小学校1・2年の複式学級については、国が示す複式学級の標準定数が8名以下なので、複式学級を解消できるケースが多く、学級数が少ないのではないかと考えられる。

④ 複式学級の学級経営において、日頃感じている良い点について

「上級生としての自覚や下級生を思いやるなど、異年齢集団の中で、豊かな人間関係ができる」と答えた学校が93.5%であった。これは、複式学級において、異学年での子どもたちのつながりが深まることを示している。また、「子どもたちが共に学び合う姿勢が身につく」も回答率が高かった。これは異学年や同学年の中で、子どもたちが共に学び合う姿がたくさん見られたことを示している。

逆に「子ども一人ひとりの指導が行き届く」「子どもの発表の機会がたくさんあるため、表現力が育つ」については、30%前後の回答率に留まった。教員側から考えた時の2学年を指導しなければならない難しさや、子ども一人ひとりに発表する時間はあっても、少人数があるが故に考えが深まらない難しさがあるその要因であると考えられる。

⑤ 複式学級の学級経営において、日頃悩んでいることについて

「教師の教材研究の負担が大きい」がもっとも回答率が高く、やはり2学年の授業準備をする教員の

負担が大きいことを示している。また「複数学年あるので、ゆったり指導することができない」「教師が直接指導する時間が不足してしまう」といった回答率も高く、複数の学年があるために、教員がゆとりをもって子どもに接することができないことを示している。

また、「子どもたちが多様な意見に触れる機会が少ない」も回答率が高く、④と関連して、子どもたちの意見の深まりが課題であることを示している。

⑥ 複式学級の学級経営において、普段から工夫していることについて

④と関連して、異学年集団の中での豊かな人間関係をつくるために取り組んでいるという回答が多くあった。「異学年でも1つの学級として一体感をもつようにしている」「登下校、行事、掃除など異学年での活動・交流機会を増やし、つながりを強める」「異学年で交流し、上の学年が下の学年をリードし、下の学年は上の学年を手本とする」といった④で多くの教員が感じている異学年の児童・生徒の豊かな人間関係育成にむけて具体的に述べている意見が見られた。

⑦ 複式学級の学級経営において、課題となっていることについて

⑤に関連して、複式学級の指導において、どうしても複数学年を一度に指導する際に、教師の目が行き届きにくくなるという回答が多かった。学級の中には、特別な支援を要する児童・生徒が在籍している場合もあり、教員が複数学年を指導する多忙さの中で、どう支援していくかも課題となる。

また、少人数であるが故に、子どもたちの人間関係が固定化されてしまう傾向があるといった回答も見られた。人間関係づくりにおいて、少人数の良さがある一方で、課題となる一面もあるということが分かる。

⑧ 複式学級の授業形態について

複式学級の授業形態は、「一人の教員による異学年一斉指導。同単元指導」や「一人の教員による学年別指導（同じ教科の指導）」「複数の教員による学年別指導」といった回答率が高かった。各学校で、児童・生徒の実態に合わせて、授業形態を教科や単元によって変えていると考えられる。

また、「一人の教員による学年別指導（異なる教科の指導）」は、17.4%と回答率が低かった。一人で2つの学年の異なった教科を教えるといった難しさがあることがその要因と考えられる。

⑨ わたりの授業の実施について

複式学級において、わたりの授業を実施している学校は、全体の82.2%である。残りの17.8%は、校内で時間割を工夫しながら、複式学級を複数の教員で指導したり、一人の教員が異学年を一斉に指導したりすることで、わたりの授業を解消している。教員の負担軽減や児童・生徒の学力保障の観点から、わたりの授業の解消に努めていることが考えられる。

⑩ わたりの授業の授業時間数について

わたりの授業の時間数については、各学校によって差があり、少ない時間数で4時間、多い時間数で15時間と幅が開いている。全授業時間におけるわたりの授業の実施率は各学校によって大きく異なっていることが分かる。

⑪ わたりの授業における教科について

教科においては、共通した特徴が見られ、国語、算数といった教科が多い。系統的に学んでいくことが重要視される教科については、異学年一斉指導を回避し、学年を別にして系統的に指導するようにしていると考えられる。

⑫ わたりの授業において、日頃、工夫している点について

「2つの時間をしっかり指導できるような直接指導と間接指導の時間の調整」「子どもがその時間を学習の手順が理解できるような学習スケジュールの可視化」「間接指導における子どもたちのとも学びの充実」「2つの学年をしっかりと指導できるように学習内容を工夫すること」といった項目が高い回答率であった。一人の教員が複数の学年を指導する際、子どもたちの学習が停滞してしまわないように、また、

教師が直接関われない時にも子どもたちの力で学びを深められるように、わたりの授業を工夫していることが分かる。

⑬ わたりの授業において、特に力を入れて取り組んでいることについて

回答のほとんどが、わたりの授業の間接指導における充実に関することであった。まずは一人学びを充実させ、そこから学習リーダーを中心としていかに子どもたちが学び合う活動を深めさせるか、ここに各学校が力を入れていることが分かる。

⑭ わたりの授業において、課題となっている点について

「間接指導における子どもたちのとも学びの充実」「間接指導における子どもたちの一人学びの充実」「2つの学年がしっかり指導できるような直接指導と間接指導の時間の調整」といった回答が多かった。⑫⑬で各校が工夫し力を入れて取り組んでいることが、課題となっていることも分かる。

⑮ わたりの授業において、特に課題となっていることについて

わたりの授業における間接指導の充実の他、違う観点で、教員のわたりの授業の経験の少なさや、教材研究の時間確保、後任者への引継ぎといった回答が見られた。複式学級の経験がある教員が少ない学校においては、これは大きな課題となると考えられる。

⑯ わたりの授業における資料がオンライン上で、近隣の学校間で共有できるシステムについて

わたりの授業の資料を学校間で共有できるシステムについては、81.1%がないと回答している。これは、複式学級での教材研究は、各担任独自で行うかそれぞれの学校の情報で行われる場合がほとんどであるということである。この点が、⑮の教材研究の時間確保といった課題とも大きく関わる。

⑰ そのシステムの有用性について

⑯でオンライン上のシステムがあるといった学校からは、「あまり役に立っていない」「活用できていない」といった回答があり、そのシステムについての有用性は確認できなかった。しかし、⑯と結び付けると、このシステムについての周知が進めば、有用性についても変化すると考えられる。

⑱ そのシステムの関心度について

システムがないと回答した学校の内、60.6%の学校が「そのシステムがあれば、ぜひ使ってみたい」と回答している。これによって、教員の負担が減少するだけでなく、児童・生徒の学びが深まることに期待している学校が多いと考えられる。

⑲ 児童・生徒が多様な考えに触れる機会や、その中で自分を表現する場が少ないことへの取り組みについて

「ゲストティーチャーなど保護者や地域の方が教育活動に参画する機会を取り入れる」「異学年で共に学ぶ授業を取り入れている」「全校朝の会、全校集会などの学校全体で共に学ぶ教育活動を取り入れている」といった回答が多く、へき地指定校や複式教育校では、保護者や地域と密接につながったり、少人数であるというフットワークの良さを生かして全校での活動を行ったりしながら、多様な考えに触れる機会をつくっていることが分かる。

⑳ ⑲について、今後取り組んでいきたいことについて

今後、各校で取り組みたいこととして回答がもっとも多かったのが、「オンラインで他の子どもと授業を行ったり、交流したりする」である。この有用性については、各校が強く認識していると考えられる。

3. 三重県のへき地教・複式教育の充実のために今後必要になってくること

(1) 三重県のへき地・複式教育の充実のため改善していくこと

以上、三重県のへき地指定校・複式教育校へのアンケートと回答とその分析を踏まえて、今後、三重

県のへき地・複式教育を充実させていくために、以下の4点を改善していくことが必要と考えている。

- (ア) 複式学級に伴う教員の教材研究の負担の軽減
- (イ) 複式学級の指導体制をいかに校内に広げて、引き継いでいくか。
- (ウ) わたりの授業の充実、特に間接指導時の子どもたちの学習活動の充実
- (エ) 子どもたちに多様な考えをもたせる取り組み

この4点を改善するために、以下のような手立てを考えたい。

(2) 学校内での手立て

① 校内の指導体制の徹底

筆者は複式教育校を参観した時、複式学級の担任から、複式学級の課題について教職員全体のものにするのが難しいという声を聞いたことがあった。特に、複式学級と単式学級が混在する学校では、複式学級の課題が教職員全体のものになりにくいのかもかもしれない。

この点において、三重県亀山市教育委員会が令和4年12月に発行した「複式学級指導の手引き」には、次のように記されている。「複式学級指導は複式学級を担任する教員だけでなく、今後1学級でも複式学級になる学年があるならば、学校全体で研修を深める必要があります。複式学級になる数年前から、複式学級を核とした校内研修や校内研究を実施することにより研究が深まります。」また、同手引きでは、「校長は、年度初めに複式学級のよさを生かした学校経営について全職員に説明したり、協議したりする場を設けたりすることが大切です。校長としては、始業式を迎える前に複式学級のよさや課題、複式学級を有する小学校に勤める教職員としての心構え等を理解しあう機会をもつ必要があります。全ての教職員が、目指す児童像を同じくし、同じ方向を向いて指導にあたることは、単式学級、複式学級に関わらず、教育目標を達成するうえでとても大切です。」と記し、管理職のリーダーシップの下、複式学級の指導について教職員の共通認識を図る重要性について触れている。

また、筆者が別の複式教育校を訪問した際、その学校の研修のまとめを読んだ。この学校では、複式教育を研修の中心に据えていた。わたりの授業における一人学びの進め方や子どもたちが主体的に進めるガイド学習の在り方など、教職員全体で研究を進めているということが分かった。このように、複式学級の取り組みについて、教職員の意思統一がなされていると、その取り組みが学校全体に浸透しやすいのは必然である。

複式学級の指導を担当だけに任せず、教職員全体で成果と課題を共有するとともに、課題克服に向けて、全体で検討していくことが上に挙げた(イ)複式学級の指導体制を校内に拡大することや引き継ぎ、また(ウ)わたりの授業の充実につながっていくと考える。

② 教職員の分担と協働

複式学級の指導について、全教職員で共通認識を図るだけでなく、教職員の分担と協働という点にも触れておきたい。

複式学級は、2学年を一斉に指導する学級形態であるため、4月になっていきなり複式学級が始まるとなっても、教員も子どもたちも戸惑うことが予想される。

ある複式教育校の校長からこのような話を聞いた。「いきなり複式学級の担任といってもすぐにはできないのではない。複式学級の準備については、数年かけてやっていく必要がある。まず複式の経験がある教員が他の教員にわたりの授業を見せる。そして、複式の指導に少しずつ慣れさせ、複式学級を指導できる教員を増やしていく。」

また、ある複式教育校の取り組みでは、来年度から複式学級となる学年の子どもたちには、今年度の終わり頃から、複式学級の授業見学をさせるようにしていると言う。そのように、子どもも段階的に慣れさせていくことが大切なのである。

複式学級の担任や子どもたちの育成について、深見智一氏は、著書「単学級担任・複式学級担任の学級経営 へき地・小規模校での事例を中心に」の中で、複式授業の導入・移行に向けたステップについて記している。特に、小学校1・2年生の複式授業の導入には、特別の配慮が必要であると述べ、段階的に教員も子どもたちも複式の授業に慣れさせていくことが必要であると述べている。その段階は4つの

レベルに分けられる。第1段階：それぞれの学年を単式で授業をし、複式学級の担任と他の教員が分担・協働する。そして、まずは、子どもたちに学習する習慣を身につけさせる。第2段階：それぞれの学年は単式で授業を行い、複式学級担任が学習計画表を2つの学年分作成し、直接指導・間接指導をイメージする。第3段階：複式で授業を始める。複式学級担任だけでなく、他の教員も入り、TTの体制で学級担任の指導や子どもたちの学習のフォローをしていく。第4段階：複式で授業を行い、子どもたちが自らの学ぶスタイルの定着を目指していく。このように職員が分担・協働しながら、段階的に移行していくことで、教員も子どもたちも複式学級の指導に適応していくことが述べられている。

また、複式学級を長年指導してきた元教員の方からは、校内の時間割を工夫することで、できるだけたくさんの教員が複式学級を指導できるようにすると、複式学級の成果や課題が職員全体のものになるという話を聞いた。そのように、4月の学校体制作りから、全職員が複式学級に関われるようにし、意識づけをしていくことも大切なことである。

このような教職員の分担や協働が、(イ)複式学級の指導体制を校内に拡大することや引き継ぎや、(ウ)わたりの授業の充実につながっていくと考える。

(3) 学校間での手立て

① 学校間での教材の共有化

複式教育校の参観で、「わたりの授業で使用するワークシートは、学校でデータとして保管して、誰でも使えるようにしています。」といった声や、「毎時間の教材の準備をするのが大変。わたりの授業に使用するワークシートなどが共有できる仕組みがあればいい。」という声を聞いた。

今回行った三重県のへき地指定校・複式教育校へのアンケートによれば、「わたりの授業における資料がオンライン上で近隣の学校間で共有できるシステムはあるか」の質問に、「ある」と答えたのはわずか10.8%である。実に約90%の学校が「ない」もしくは「わからない」と回答している。

「ある」と答えた学校においては、「そのシステムが役に立っているか」の質問には、「大変役に立っている」という肯定的な回答は得られなかった。しかし、この要因を調べてみると、そのシステムはあるものの、教職員の多忙さから、資料がクラウド上にあまり提供されていないことが分かった。つまり、情報量の少なさから、あまり有用性を感じられていないということだった。

しかし、もしこのシステムが、三重県全域に拡大されたらどうだろうか。このようなシステムを、三重県のへき地指定校・複式教育校全てが周知し、資料を提供すれば、莫大な情報量となり、有用性は非常に高まるのではないか。アンケートにおいては、約96%の学校が、「そのシステムがあればぜひ使ってみたい。」「少しは使ってみたい。」と回答していると期待の声を寄せている。

クラウドの中で、各学校で使用したワークシートや、指導案、各学校での複式の授業でのルール、学習スケジュールなどを共有する。その資料を閲覧し、自分の学級の児童・生徒に合うように資料を編集して新たな実践が生まれ、さらに、それを共有していく。このような仕組みを構築していくことが、(ア)の複式学級に伴う教員の教材研究の負担の軽減につながるとともに、(ウ)のわたりの授業の充実にもつながっていくと考える。

② オンラインでの交流授業

へき地指定校・複式教育校に在籍する児童・生徒数は少ない。その中で、子どもたちに多様な意見に触れさせ、考えを深めさせることが難しいと感じている教員は多い。アンケートの中でも、子どもたちが様々な意見を聴く機会が少ないという意見が見られた。特に、学年の児童・生徒数が1名や2名の極小規模の学級では、その傾向は強くなると考える。

そして、実にアンケートにおいて、75%の学校が、今後取り組んでいきたいこととして、オンラインで、他の学校の児童・生徒と授業を行ったり、交流したりしたいと回答している。今後、このオンラインでの交流学习は、へき地・複式教育の取り組みにおいて、重要な柱となるだろう。

近年、日本各地のへき地指定校や複式教育校において、オンラインによる遠隔合同授業の取り組みが、報告されている。複数の学校をオンラインでつなぐことにより、複数の学校の児童・生徒が同時に授業を受けることができる。教員による説明や発問を同時に聴くことができ、黒板への板書や教材も共有することができる。全体で行う発表や話し合いをはじめ、違う学校の児童・生徒でペアやグループを作っ

て活動することも可能である。さらに、協働学習用ツールを使って、児童・生徒が情報共有をして、それをもとに課題に取り組むことも可能である。このような遠隔授業が広がることで、児童・生徒が多様な意見に触れる機会が増え、考えが深まっていくのではと考える。

また、この遠隔合同授業は、児童・生徒ばかりでなく、教員にも良い影響がある。それは、教材研究が二人でできるということである。授業についてのアイデアを複数校の担当で話し合うことで、授業の質が高まったという報告もされている。

さらに、オンラインにおける遠隔合同授業の発展型として、鹿児島県の徳之島で行っている1つの教室で、2つの遠隔合同授業を行うスタイルがある。例えば、A小学校3・4年複式学級とB小学校3・4年複式学級の場合、A小学校3年とB小学校3年は、A小学校の教員が指導し、A小学校4年とB小学校4年は、B小学校の教員が指導する。これにより、教員が児童・生徒を直接指導する時間を十分確保することにつながり、学びの質が向上したことが報告されている。

このようなオンラインによる遠隔授業を進めていくことには、計画の段階において、校時の調整、実施日の調整、教材準備、機器の設置など、各校において打ち合わせをしておくことがたくさんあるが、まずは、一度、試してみることが大切であろう。そして徐々に回数を増やすことで、教員も児童・生徒も慣れていくのではないだろうか。このような取り組みは、(ア)の複式学級に伴う教員の教材研究の負担の軽減や、(エ)の子どもたちに多様な考えをもたせる取り組みにつながっていくと考える。

③ 大学・附属学校と各学校との連携

学校間の連携とは、小学校や中学校の連携に留まらず、大学や附属学校と連携しながら、今後のへき地・複式教育を充実させなければならないと考える。

全国的にへき地が多い北海道や長崎県、鹿児島県、沖縄県といった地域の大学のカリキュラムを見ると、へき地・複式教育のカリキュラムを開講している。学生は、へき地・複式教育についての現状や課題を知るだけでなく、その特性を生かした教育活動を学んでいく。さらに、より実践的に指導案の作成やへき地校や複式教育校への教育実習を実施している大学もある。しかし、一方で、2023年度において、三重県に、そのようなカリキュラムを実施している大学はない。そのような状況の中、学生が教職に就いた時、赴任先が複式教育校である可能性もある。大学生に、へき地・複式教育について、基礎的な知識や技能を身につけさせることは喫緊の課題だと感じる。

また、附属学校との連携も大切である。へき地・複式教育が盛んな地域では、附属小学校に意図的に複式学級を設置し、複式教育の研究を熱心に進めている学校がある。附属学校が複式教育についての研究を進め、地域の小中学校に発信していくことも、今後期待していきたい。

このような大学や附属学校と小・中学校の連携が、(ウ)のわたりの授業の充実につながっていくと考える。

4. まとめ

以上、これからの三重県のへき地・複式教育を充実させていくために、現在の課題とその改善策について述べた。改善策のキーワードは、情報共有と協働である。学校内においても、学校間においても、教職員が、日頃から情報を共有し、協力して取り組んでいくことが、今後の三重県のへき地・複式教育を発展させていくと考える。

令和3年1月26日の中央教育審議会において、『令和の日本型教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び～(答申)」の中で、次のように記されている。「社会の在り方が劇的に変わる『Society5.0』の到来と新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な『予測困難な時代』の中で、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることが必要」。そして、「2020年代を通じて、実現すべき『令和の日本型学校教育』の姿として、個別最適な学びと協働的な学びの学びを一体的に充実し、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげることが大切」と記されている。

この答申を鑑みたとき、へき地・複式教育の充実が、令和の日本型学校教育の実現につながっていく

と感じる。へき地・複式教育は、児童・生徒が少人数のため、教員が児童・生徒の成長やつまずきについて把握しやすく、また、一人ひとりの興味や関心・意欲を把握した上で、きめ細かく指導・支援していくことが可能になる。また、わたりの授業における充実した間接指導は、児童・生徒が、探究的な活動や体験活動等を通じ、協働しながら、課題を解決していくことで、様々な社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手をなるとなるような資質・能力を育成することにもつながっていく。まさに、へき地・複式教育がこれからの令和の日本型学校教育のモデルとなって、他の学校に向けて発信していくことができるのではないだろうか。その可能性に期待したい。

そのために、今回の研究結果を各小中学校や教育委員会、大学等と情報共有するとともに、先に述べた改善策について他の学校と連携しながら取り組んでいきたい。

5. 引用文献・参考文献・注

引用文献・参考文献

長崎県教育センター (2007. 3) 子どもの学びを支える複式授業

「公立義務教育諸学校の学級編成及び教職員定数の標準に関する法律」(2023. 5. 1 施行)

文部科学省(2020. 6. 18)「新しい時代の初等中等教育の在り方」第10回特別部会配布資料

https://www.mext.go.jp/content/20200618-mext_syoto02-000008021_9.pdf

三重県小中学校校長会(2020. 9. 1)「小中学校教育の充実発展に関する施策並びに予算」について

亀山市教育委員会(2022)「複式学級指導の手引き」32-33 36

鳥羽市立菅島小学校(2022)「研修のまとめ」

深見智一(2018)「単学級担任・複式学級担任の学級経営 へき地・小規模校での実践事例を中心に」65-68

文部科学省(2018. 9. 13)遠隔学習導入ガイドブック第3版「第4章 遠隔合同授業の実践例」「第5章 遠隔合同授業の効果を高めるために」

鹿児島県徳之島町立母間小学校「遠隔授業で複式指導を充実 小規模校で高め合う徳之島型モデル：第2回NITS大賞活動発表会」<https://youtu.be/f01siAdXcGo>

篠崎信彦、中山八重子(2020)長崎大学「複式教育論」シラバス

篠崎信彦(2023)長崎大学「複式学級の教育と実際」シラバス

伊端俊紀(2023)北海道教育大学「へき地教育論Ⅰ」シラバス

伊端俊紀、川前あゆみ(2023)北海道教育大学「へき地教育論ⅠⅠ」シラバス

永山昌史、伊端俊紀(2023)北海道教育大学「へき地校体験実習Ⅰ」シラバス

永山昌史、伊端俊紀(2023)北海道教育大学「へき地校体験実習ⅠⅠ」シラバス

広島大学附属東雲小学校(2010. 6. 25)複式教育ハンドブック—異学年が同時に学び合うよさを生かした学習指導—

中央教育審議会(2021. 1. 26)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)(概要)1-2

文部科学大臣官房審議官 安彦広斉(2023. 7. 23)へき地・離島・小規模校教育推進フォーラム 参考資料1「新たな教育振興基本計画について」、参考資料2「持続的で魅力ある学校教育のための取組について」

注

ⁱ へき地指定校：「へき地教育振興法」「へき地教育振興法施行規則」によって、へき地と指定された学校。へき地の度合いを算出する点数によって、「特」「準」「1級」「2級」「3級」「4級」「5級」に分けられる。

ⁱⁱ 複式教育校：三重県へき地複式教育研究による「三重県へき地指定校及び指定外複式学級校一覧表」の中にある複式学級校のことを、本論文では複式教育校として論じた。この学校は、「公立義務教育諸学校の学級編成及び教職員定数の標準に関する法律」によって、複式学級が適応される学校である。ただし、学校編成や教職員編成については、各学校の児童・生徒の実態に応じ、県や市町村の教育委員会が基準を設定することができるため、複式教育校が必ずしも複式学級を設置しているとは限らない。